

西鶴俳諧注釈

——「烏賊の甲や」独吟百韻——

竹内 千代子
乾 裕 幸

西鶴の「烏賊の甲や」独吟百韻は、延宝六年自序・独長庵石齋編『珍重集』に収められている。制作年次は、発句の季と、延宝六年に三十七歳の春を迎える心を詠んだ挙句とから、延宝五年冬と推定される。

長い前書が付いており、古流・当流のいずれにも偏しない中庸の正風俳諧を庶幾したことが知られる。注釈にさいしては左のような配慮をした。

一、本文の漢字は、二三の例外を除きすべて現行の字体に改めた。仮名づかいはもとのままである。

一、注釈文中、(類)とあるのは『俳諧類松集』の、(類字)とあるのは『類字名所和歌集』の、それぞれ略号である。

品く言葉のかさりとて、此二とせ計の俳諧をきくに、新古今集を枕箱に仕込て、

*

京夕なかめ春日いさよふ
柳桜くれな井た、む毛毘に
久三郎是もおもしろの花の都、といふ前句にこそ、柳桜もよるへし。

又、正風躰にまことありとて、大事に物かたふつけられ侍るも殊勝にこそ。

針かねのつよひ酒のミ宵の月

相撲の関の包丁の柄

はきれのせぬつけかた、はかねむねにまはりてなんのやくにかたつへし。古流当流のまん中に広き道筋あり。是を君が代の東の果、西国の末迄も。

○前書。

○品。言葉のかざり―種々に趣向をこらしたことの幹旋、付合というほどの意。○此二とせ計 延宝四・五年。○新古今集―古今集の誤り。次の付合は「見渡せば柳桜をこまませて都ぞ春の錦なりける 素性法師」(古今集卷一・春)による。○枕箱―枕や手回りの品・金子などを入れる箱。ここは本歌を踏まえての意。○久三郎―下僕の通称。○おもしろの花の都―放下の小歌「東には祇園清水、落ちくる滝の音羽の嵐に、面白の花の都や、筆に書くとも及ばじ(略)地主の桜は散り散り、西は法輪嗟峨の御寺、廻らば廻れ水車輪の臨川堰の川波、川柳は水に揉まるる、しだり柳は風に揉まるる」(閑吟集)による。○よるべし―付くだらう。この一対は当流の疎句体であることをいう。○正風鉢―連歌の付合を規矩とする純正の俳風。狭義には貞門風を指す。○物がたふつけられ侍る―寄合などをたばさんで、懇ろに付ける。○相撲の関―相撲の関取り。松尾明神では八朔に神事相撲が行われたが、同明神は酒の神なので、「酒のみ」に付く。また「強―相撲」類。○包丁の柄―針金を巻いて

固定するので「針金」に付く。○はがねむねにまはりて―刃物が鈍くなって。「包丁」の縁語。「むね」は背。「宵の月」に対する雅のあしらいもなく、ただ付物でからめあげただけの古流の付合を批判する。○古流―貞門風。正風ではあるが、齒切れの悪い四つ手付の俳風をいう。○当流―最新流行の俳風。宗因流を含むが、ここは付合を疎外するような新奇すぎる俳風を指す。○まん中に広き道筋あり―二河白道説による。中庸の俳風。当流でしかも正風の俳諧。

俳諧独吟

烏賊の甲や我か色こほす雪の鷺

井原西鶴

○発句。○冬(雪)。

○烏賊の甲―足をつけて玩具の鷺を作る。八朔の日の子供の遊び。○我が色こほす雪の鷺―雪中鷺とびきゆる雲るの鷺の羽風よりわが色こほす雪の明ぼの」(正徹・草根集卷三)。「句卷十二ヶ月」の前書きに、「雲るの鷺といふ名歌の言葉をかきて、俳の一句をなす事よしなし。是は子ども細工にしておかし」とある。○烏賊の甲で作った鷺は、まるで白鷺が自分の真白な色をこぼしたような雪の中に立っているというほどの意。

汀の水はりぬき細工

○脇。○冬(氷)。

○汀―「汀―鷺」(類)。○はりぬき細工―張子の細工物。

○雪の鷺が烏賊の甲の玩具ならば、汀の水はさしずめ張りぬき細工であろう。前句の玩具に応じて、水が張ると言い掛けたのである。

灯燈をた、めハ浪の紋消て

○第三。○雑。

○灯燈―チャウチン。提燈・挑灯に同じ。「はりぬき細工」に付く。

「張―行灯・灯籠」(類)。○た、めば―「畳―波・挑灯」(類)。

○浪の紋―提燈に付いている波の紋様。「汀」に付く。

○張りぬき細工の提燈を畳むと、波の紋様が消えて見えなくなったという意。

あかりて跡はから舟の月

○初才四。○秋(月)。月三句引き上げ。

○から舟―空船。○月―月は船に譬えられることが多い。「挑灯―月夜」(類)。

○荷が陸揚げされ、提燈も畳まれて、後には空船が月夜に浮かんでゐるさま。

稲葉みたれ百目の時のかねの声

○初才五。○秋(稲葉)。

○百目―銀百匁。○かねの声―「月―鐘の音」(類)。

○米相場が高騰して、高値で売り捌くと、後には輸送船が空になって月下に浮かぶ。前句の「あがりて」を米価高騰に取り成し、米一石が銀百匁で売買され、時の鐘ならぬ銀の音がすると言い立てたわけ。

明るとしまた秋風ぞ吹

○初才六。○秋(秋風)。

○秋風ぞ吹―「昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹くよみ人しらず」(古今集巻四・秋)。「秋風―稲葉」(類)。

○明くる年もまた秋風が吹き、稲葉が乱れて豊作である。遣句。

都をハふるひ付句の出しかと

○初才七。○雑。

○都をば―「後拾遺旅 都をば霞とともに立しかど秋風ぞ吹しら川の関 能因法師」(類字)。「都を思―秋風ぞふく白川の関」(類)。

○ふるひ付句―古風な付句。

○能因ならぬ古い付句が、都を出て白河に着くころには、また秋風

が吹く。明くる年もまた古風な付句を出したけれど、毎年同じでは秋風が吹く(飽きがくる)というのである。

柳桜はすたる紙屑

○初オ八。○春(柳桜)。

○柳桜―「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける 素性法師」(古今集巻一・春)。「都―柳・桜」(類)。○すたる―「捨―古きなじみ」(類)。

○都から古い付句が出たが、そこに詠まれた柳も桜も散ってまるで紙屑のようだ。つまり付句の懐紙は反故となつてすたるというのである。

胡椒包蝶は当座におり居て

○初ウ一。○春(蝶)。

○胡椒包―胡椒の粉の紙包みで、蝶の形に折る。○蝶―「蝶―うどんのこせう」(類)。○当座―即座。○おり居て―ヲリスエテ。折紙細工を作る。「折―紙」「折紙―柳の枝」(類)。

○当座に折りすえた胡椒の包みの蝶は、用がなくなると柳・桜が散つて紙屑のようになるのと同様に反故になる。

七日の仕あげ夢なれや春

○初ウ二。○春(春)。

○七日の仕あげ―人の死後七日にして精進あげをし、日常の生活に戻る。忌明け。○夢―夢に胡蝶となった莊子の故事によつて蝶をあしらう。「蝶―夢」(類)。○夢なれや春―「新古今冬 津国のなにはの春は夢なれやあしの枯はに風渡るなり 西行」(類字)。

○七日の仕上げも春の夢か現つのうち過ぎ、その席では胡椒包みの蝶を折つてうどんを供する。

今以まことにならぬ難波風

○初ウ三。○雑。

○今以―イマモツテ。「其上一年渡辺福鳥を出でし時は以ての外の大風なりしに、君御船を出し、平家を亡ぼし給ひし事、今以て同じ事ぞかし。急ぎ御船を出すべし」(謡曲・船弁慶)。○まことにならぬ―信じられない。○難波風―前出西行歌によるあしらい。

○一句は、難波に吹いた大風は今以て信じられないという意であるが、付意は、はや今日は初七日の精進あげの日であるが、今以て死んでしまった事が信じられないというのである。

をのれつねく千三つの浦

○初ウ四。○雑。

○千三つー千の内三つほどしか真実はないという意で、嘘つきのことをいう。御津の浦に言いかける。○三つの浦ー「後撰 難波津を今日こそみつの浦ごとに是や此世を海渡る舟 業平朝臣」(類字)。

「難波ー御津の浜」(類)。

○おのれは常々うそばかり言つて、今以てまことのないことだ。前句の「難波風」に御津の浦をあしらい、言葉の縁で付けた。

出来坊狂言綺語をすて小舟

○初ウ五。○釈教(狂言綺語)。

○出来坊ーデクルバウ。人形。操り人形。○狂言綺語ーキヨウゲンキギヨ。道理に合わず、巧みに飾ったことば。「千三つ」に付く。

○すて小舟ー「南無や西方弥陀如来、狂言綺語を振り捨てて」(謡曲・源氏供養)に言いかけ、「三つの浦」をあしらった。

○常づね虚構を演じていた操り狂言の人形は、狂言綺語を振り捨てた、というほどの意。

楊弓はやれハ松ハさひしき

○初ウ六。○雑。

○楊弓ー楊柳で作った射的遊戯用の小さな弓。「嬉遊笑覧」に「楊

弓のはやりしは寛永前後のころ、犬子集近年聞書の部に、世上に楊弓のはやり伝りければ(略)また、天和貞享ころの草子にも多くみゆ」。○松はさびしきー「淋敷ー松風・舟待」(類)。

○楊弓が流行ると、松は捨て置かれて淋しいことである。「松」に間狂言ののろ松人形の意をもたせて、前句「出来坊」をあしらった。

六間ハ近きうしろに須戸の山

○初ウ七。○雑。

○六間ー楊弓場の射程距離にとりなす。多くは七間半を定式とした。

○近きうしろにー「もしほの煙松の風いづれか淋しからずといふ事なし(略)人音稀に須磨の浦近き後の山里に柴といふ物の候へば」(謡曲・忠度)。○須戸の山ー「松風ーすまの海女」「山ー松」(類)。

○楊弓場の距離にも足らぬ六間ほどの近きに、淋しい松風の吹く須磨の山がある。

姪から婢から続く柴の戸

○初ウ八。○恋(婢)。「毛吹草」俳諧恋之詞「婢入」。

○姪から婢からー「近きー親類・となり」(類)。○柴ー「柴ー須まの山」(類)。

○姪やら婢やらが、柴の戸を連ねて六間ほどの近くに住んでおり、

後ろには須磨の山が控えている。前句謡曲「忠度」に拠る付け。

「須磨」に住むの意を読み取った。

ない物はかしたりかつたり恋衣

○初ウ九。○恋（恋衣）。

○ない物は柴の戸続きの姪やら聲やらから貸し借りをして、ついには恋衣までも貸し借りする恋仲になったという次第。

道中互に寝ての朝露

○初ウ十。○秋（朝露）。○恋（互に寝て）。

○道中のこととて無いものは貸したり借りたりして、恋仲の二人は、恋衣ひとつに共寝をして、露の朝を迎えるというのである。

手たらいへ取水莖の岡の月

○初ウ十一。○秋（月）。月一句こぼす。

○手たらい―洗顔用の盥。「朝―手水・月薄き」（類）。○水莖の岡―近江国の歌枕。「古今大歌所御歌 水莖の岡の屋形に妹とあれとねての朝けの霜の降はも」（類字）を踏んで前句に付く。「取水」に言いかけた。

○旅の宿で朝露の残る頃起きて、手盥へ水を汲むと、水莖の岡の残

月が映る。湖ならぬ盥のなかに映る月は談林調。恋ばなれ。

髪結床の山の端のいろ

○初ウ十二。○秋（山の端のいろ）。

○髪結床―男の髪を結い、髭・月代などを剃るのを業とした家。

「手盥」に付く。「手たらい程に見ゆる湖／鏡山いざ立よりて髭そらん 宗因」（当世男）。「床―月」（類）。○床の山―近江国の歌枕鳥籠（とご）の山に言いかける。○山の端のいろ―「秋風の日けに吹けば水莖の岡の木の葉も色づきにけり」（万葉集卷十・秋）。

○早朝から髪結床では、手盥へ水を汲んでいる。水莖の岡の残月が山の端を照らし、盥の水に映っている。道中の早起きから髪結床の早起きに転じた。

人は身持花あれハこそ病上り

○初ウ十三。○春（花）。○花の定座。

○人は身持―人は身持ちが大切である。○花―「山の端のいろ」のあしらい。「山―花」（類）。○病上り―「床」に付く。色葉字類抄「労疲（トコツミ） 久病身付板也」。

○人は身持ちが大切だ、人には花あればこそと、病み上がりの身にはしみじみと感じられ、さっそく髪結床へ行くのである。

堪忍五兩「帰る空

○初ウ十四。○春（「帰る」）。

○堪忍五兩一語。堪忍すれば大きな利益を得るという意。「身持」に付く。○「帰る」前句「花」のあしらい。「花」帰雁（類）。○人は身持ちが大切、じっと我慢をすれば病も治る、というほどの意か。「五兩」からは、商人が故郷に錦を飾り帰郷するさまも窺われる。

少の義ねたりか、つて横霞

○二オ一。○春（横霞）。

○ねだりかかつてー言い掛りをつけて無理に金品を奪うこと。○横霞ー「帰雁をよめる 春がすみ立つを見すてて行くかりは花なき里に住みやならへる 伊勢」（古今集卷一・春）。「霞」帰雁（類）。「横」に、横道・横車の意を響かせる。

○少しの義をたてに言い掛りを付けられ、五兩をねだり取られても堪忍するというのである。

釈迦はねはんの雲のときれか

○二オ二。○春（ねはん）○釈教（釈迦・ねはん）。

○ねはんー涅槃。釈迦入寂は陰暦二月十五日。○ねはんの雲ー釈迦

入寂を月が雲に隠れるのに譬える。「大恩教主の秋の月は涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢驚かすべき人もなし」（謡曲・安宅）。

○横霞がかかるように釈迦の涅槃のときには曇ったが、今は悟りが啓かれて雲も途切れている。謡曲「安宅」の、少しのことで言い掛りを付けて関を通さない気分を含むか。

なかぬ者ハなかり泪の雨はれて

○二オ三。○雑。

○なかぬ者はなかりー釈迦の涅槃に立会った五十二の生類の悲しみ。○雨はれてー「雲のときれ」のあしらい。「雲」雨（類）。

○釈迦の涅槃に立会った者で泣かない者はなく、雨のように涙が流れる。

俄にくつれた山ほと、ぎす

○二オ四。○夏（山ほと、ぎす）。

○俄ー「俄」雨（類）。○山ほと、ぎすー「くづれた山」に掛ける。「むかし思ふ草のいほりの夜の雨になみだなそへそ山ほととぎす 皇太后宮大夫俊成」（新古今集卷三・夏）の歌から、「涙ーほと、ぎす」「雨ーほと、ぎす」（類）。

○俄に山崩れが起こり、ほととぎすをはじめ、全山驚いて鳴（泣）

かないものはない。泪の雨で山が崩れたと言いつたのである。

鶯の子を逆におひにけり

○二〇五。○夏（鶯の子）。

○鶯―鶯は夏雛を生ずる。郭公は鶯の巢に卵を産み、鶯に育てさせる習性を持つ。郭公が鶯より早く孵化して、目の開かぬ内の雛が鶯の卵を背負って巢の外に放り出すと言う。「郭公―鶯」(類)。○逆―サカサマ。

○俄に山が崩れたので、山ほととぎすは慌てふためいて、鶯の子を逆さまに背負って逃げるという俳諧。

只の気でない住吉の浜

○二〇六。○雑。

○只の気でない―正気でないこと。○住吉の浜―摂津国。潮干狩りで有名。「住吉―塩干三月三日」「浜―貝拾ふ」(類)。

○住吉の浜で子を背負って潮干狩りをするさま。背中の子は逆さまになっている。親は潮干狩りに夢中。正気の沙汰じゃない。

人參よ爰ハ生死の堺にて

○二〇七。○雑。

○人參―朝鮮人參。高貴薬。「本朝世事談綺」に「人參の功は、古より普く世にしるといへども、寛文延宝のころ、數原通玄といふ良医、朝鮮人參の機能を考賞、大病の治しがたきを救ひ、衆人の命を助る事限しられず。(略)そののち堺屋七郎兵衛、するが町におゐて、人參座立つ」。○生死の堺―生死の堺に大坂の堺を言いかける。「堺―住吉」(類)。

○生死の堺にいて人參を所望する。いまや只の気ではない。

一之進にも見せる並松

○二〇八。○雑。

○一之進―居合拔を見世物に人寄せした齒磨売り。「人參」を居合拔の小道具に見立てて付く。○並松―街道筋の松並木。「並木の松―海道」(類)。「堺」に付く。

○一之進が旅中の街道筋で倒れ、人參を所望するさま。「並松」は、あの世とこの世との堺に植えられた松並木の意もあろう。

請太刀のあい手ハ入て行風

○二〇九。○雑。

○請太刀―居合拔に付随して、軽口で客を笑わせ商品を売る者。○風―「並松」のあしらい。「松―吹あらし」「嵐―松」(類)。

○一之進の請太刀があいの手を入れる。嵐が街道の並松を吹きぬける。

けんしか立て紅の雲

○二オ十。○雑。

○けんしー検使。殺傷・自殺・変死などの実情を調べ確認すること。

また、その役人。○紅の雲ー「立て」を受け、前句の「嵐」をあしらうが、紅は血を仄めかす。

○刃傷沙汰に検使が立つて、相手の紅を調べている。

八重垣の歌盗人やく、るらん

○二オ十一。○雑。

○八重垣の歌ー「素盞鳴尊は天照大神の兄なり。女と住み給はむとて、出雲国に宮造りしたまふ時に、その所に八色の雲の立つを見てよみたまへるなり。八雲立つ出雲八重垣妻籠めに八重垣つくるその八重垣を」(古今集・仮名序) によって「紅の雲」に付く。○歌

盗人ー大伴黒主。謡曲「草子洗小町」に、内裏の歌合に相手の小野小町に勝ちたい大伴黒主は、前日小町宅に忍び込んで歌を立ち聞きし、当日小町の歌が万葉集からの盗作であるとして草子を見せるが、この草子が洗われると加筆の歌は洗い流され、小町の汚名がそそが

れる、とあるに拠る。「垣ー盗人の道」(類)。○くゝるらんー「古今秋下 又拾遺冬 千早振神代もきかずたつ田川唐紅にみづく、るとは 業平朝臣」(類字) の「くゝる」(染める)を「くゝる」(潜る)と読むのは談林の常套。

○昔、歌盗人の大伴黒主は、歌を盗もうと八重垣を潜ったことだろう。今、事実改めの検使が立ち合い、この垣を盗人がくぐったものと推定している。

和国の風俗すかぬ闇の夜

○二オ十二。○雑。

○和国の風俗ー「生きとし生ける物何れも歌をよむなり。実にや和国の風俗の」(謡曲・白楽天)。「西鶴独吟百韻自註絵巻」に「和歌は和国の風俗にして、八雲立御国の神代のむかしより今に長く伝て」。○和歌は和国の風俗で、八雲立つ神代の昔から今に長く伝えている。その風俗にとつて、歌盗人がやってくる闇の夜は好かぬものだというのである。

別にもなかぬ鳥は御尤

○二オ十三。○恋(別)。

○なかぬ鳥ー伝足利義政作「闇の夜になかぬ鳥の声きけば生れぬ先

の父を恋しき」(長頭丸隨筆)。「闇の夜―なかぬ鴉」(類)。

○別れに泣くのは尤もなことなのに、和国の風俗では、闇夜には鳥が鳴かないので好かぬことだ。

明て口舌の野辺となる月

○二才十四。○秋(月)。月一句こぼす。○恋(口舌)。

○口舌―クゼツ。男女間の痴話げんか。○月―「鳥」のあしらい。

「鴉―月夜」(類)。月夜鳥は、月の明るい夜に浮かれて鳴く鳥の意。転じて夜遊びの人を言ふ。

○後朝の別れに泣かないのも尤もで、夜が明けてはや痴話げんかが始まっている。

花薄ふみつけらるゝ道の者

○二ウ一。○秋(花薄)。○恋(道の者)。

○花薄―『滑稽雑談』に「穂の出たるを花す、きともいへり」。「尾花―道のへ」。「野―薄」(類)。○道の者―遊女。『渡世身持談義』に

「道の者は子を産まず」。「ふみつけらるゝ道」と続き、「口舌」に付く。

○残月の野辺にある花薄が踏み付けられるというのに、道の者が口舌の果てに踏み付けにされる意をからめた。

早繩しめる枝の糸萩

○二ウ二。○秋(糸萩)。

○早繩―人を捕らえて速やかに縛るための縄。捕縄。○しめる―締める。同義する意を含んで恋離れとする。○糸萩―「花薄」のあしらい。「萩―薄」(類)。

○前句「道の者」を盗人などに取り成し、これを踏み付けて、早繩で縛り上げるさま。

欠所して女鹿ハ所追はらひ

○二ウ三。○秋(女鹿)。

○欠所―所払い(追放)以上の刑に付加して、田地・家財などを没収する刑罰。○女鹿―「糸萩」のあしらい。「萩―鹿」(類)。

○早繩で捕えられた女鹿は、欠所して所払いとなった。

向ひへのけるあハち嶋山

○二ウ四。○雑。

○のける―退ける。○あはち嶋山―「鹿―淡路」(類)。

○欠所して所払いとなった女鹿は、向かいの淡路島へ退けられる。淡路島を流刑の地に見立てた。

生*靈ハ飛火の玉にあらはれて

○二ウ五。○雑。

○生*靈―生きている人の怨靈。○火の玉―ひとだま。「あはち嶋山」に付く。「わたづみのかざしに挿せる白玉の波もて結へる淡路島」(謡曲・淡路)。

○淡路島は、生靈の火の玉が現れるので、向かいに退けるといふのである。

うつなり〜恨の釘鍛冶

○二ウ六。○恋(恨)。

○うつなり〜「是は天鼓が亡靈なるが、御甲の有難さにこれまで現れ参りたり。(略)打ち鳴らす其声の〜呂水の波は滔々と打つなり打つなり汀の声の」(謡曲・天鼓)。○恨の釘―丑の刻参り。「恨の数積つて執心の鬼となるも理や。いで〜命を取らん。いで〜命を取らん。しもとを振り上げうはなりの髪を手にからまいて打つやうつの山の」(謡曲・鉄輪)。○鍛冶―「飛火―鍛冶」(鍛冶―物化祈^ル) (類)。

○生靈が現れて恨みの釘を打ちに打つ意に、鍛冶が火の粉を飛ばして鉄を打ちに打つ意を重ねる。

後妻や摺子木味噌こし杓子掛

○二ウ七。○恋(後妻)。

○後妻―ウハナリ。後妻打。離別された先妻が、親しい女どもを頼み、使者を立てて予告し、後妻の台所から乱入して家財などを打ち壊した。○摺子木―「格気―摺子木」(類)。○杓子掛―「釘」のあしらい。

○鍛冶の先妻が、後妻打ちだと言つて摺子木やら味噌こしやら杓子やらで恨みの相手の後妻を打ち叩くさま。

恋の中宿一段の勝手

○二ウ八。○恋(恋)。

○中宿―男女密会の宿。出合茶屋。○一段の勝手―一段と都合がよい。「勝手」に勝手方(台所)の意を含んで、前句の「摺子木味噌こし杓子掛」をあしらつた。

○後妻との恋中の宿は、一段と都合のよいもの。

南面東まくらにみたれそめ

○二ウ九。○恋(まくらにみだれそめ)

○南面―ミナミオモテ。南に面した部屋。○東まくら―頭を東に向けて寝ること。○みだれ―「乱―恋」(類)。

○一段と勝手のよい恋の中宿に南面東枕に寝て、恋に乱れそめた。
西鶴の面目躍如たる付合。

へるをかまはぬ人間の水

○二ウ十。○恋（人間の水）。

○人間の水―腎水。精液。「人間の水は南、星は北にたんだくの」

（謡曲・天鼓）を踏んで「南」に付く。

○ひとたび恋に乱れ染めれば、精液の減るのもかまうものか。

つかひ墨へだつる雲の身を替て

○二ウ十一。○雑。

○つかひ墨―使い込んだ墨。「ちびる―墨」（類）。○へだつる雲の

身を替て―「しかれば人間にあらずとて、隔つる雲の身をかへ、仮

に自性を変化して、一念化生の鬼女となつて」（謡曲・山姥）を踏

まえ、前句「人間」に付く。

○水の減るのもかまわず墨もすり続けるとちびて形を変える。人間

も鬼女となつて姿を変えてしまふ。謡曲「山姥」の佛を踏まえた付

け。

げんざい鶴のかかハ成らん

○二ウ十二。○雑。

○げんざい鶴―謡曲の曲名「現在鶴」。同曲に「黒雲一むら飛び来

り御殿の上にご懸りける。（略）化生のまん中射させて給べと眼を

開き能々見れば、頭は猿、尾はくちなは、足手は虎の如くなるが啼

く声鶴に似たりけり。「鶴―黒雲」「変化―鶴」（類）。○にかは―

膠。墨を固める材料。

○「へだつる雲」を射ると、鶴が正体を現わす。他方、墨の正体は

膠であろうと言ひ立てた。

月花の浪の流に鼻ふ、き

○二ウ十三。○春（花）。○花の定座。○月二句こぼす。月がこぼ

れて来て、月花が取り合わされる例は、しばしば見受けられる。

○浪―花の浪の言ひ掛け。○鼻ふ、き―くしゃみで出る涙と花吹雪

との言ひ掛け。

○浪の流れに花吹雪ならぬ膠の溶き汁のようなくしゃみの涙を吹き

散らすというのである。

春行水をく、るいきをひ

○二ウ十四。○春（春）。

○春行水―ハルユクミツ。○く、る―括る。括り染めにする。「木

で鼻をくくる」というから「鼻」に付く。

○鼻ぶゞきは、流れ行く春の水をも括る勢いである。

年徳の神代もきかず筑广川

○三才一。○春（年徳）。

○年徳―その年の福徳をつかさどる神。「神代」を導く序詞。○神

代もきかず―「古今秋下 又拾遺冬 千早振神代もきかずたつ田川

唐紅にみづく、るとは 業平朝臣」（類字）。○筑广川―信濃川の

上流、千曲川。「風雅春上 ちくま川春行水はすみにけり消えていく

かの峰の白雲 順徳院」（類字）から「筑摩川―春行水」（類）。

○筑摩川の春行く水を括るとは、神代の昔から聞いたことがないとい

うのが付筋。

○三才一。○雑。

○蓬萊―中国の神仙思想で説かれる仙境。方丈・瀛州とともに三神

の一つ。渤海湾に面した山東半島のはるか東方の海中にあり、不老

不死の仙人が住むと伝えられる。○さゞれ石―「わが君は千代に八

千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで よみ人しらず」

（古今集卷七・賀）。「筑摩川」に付く。「筑摩川―さゞれ石」（類）。

○さざれ石が年を経て蓬萊山になると言うようなことは、神代の昔から聞いたことがない。「蓬萊」に新年の祝儀蓬萊山をかたどった飾り物の意を掛け、前句の「年徳の神」をあしらった。

緒しめにハ玉のありかを尋きて

○三才三。○雑。

○緒しめ―穴に口ひもを通し、袋・巾着・印籠などの口を締めるもの。多く球形で玉・石・角・象牙・金属・珊瑚などで作る。緒止め。

「粒―緒しめ」（類）。「さゞれいし」に付く。○玉のありかを尋きて―

「此度蓬萊宮にと急ぎ候。（略）今はかひなき身の露の有るにもあらぬ魂のありかを、これまで尋ね給ふ事御情には似たれども」（謡曲・

楊貴妃）。

○緒しめにするための玉を捜し求めて、蓬萊山に尋ね来た。玄宗皇帝が楊貴妃の魂を蓬萊宮に尋ねさせた故事によって、前句「蓬萊山」

に付くが、楊貴妃の魂ならぬ緒しめの玉を捜すと言ったのが俳諧。

地獄市には迷ふ道野辺

○三才四。○釈教（地獄）。

○地獄市―盗品の市か、私娼の市か、用例未見。「地獄」は、天道・人間道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道の六道の一つ。また、私

娼をいう。「守貞漫稿」に「地獄 坊間の隠売女にて、陽は売女に非ず、密に売色する者を云」。○市―「市―盗人」(類)。○迷ふ―「迷ふ―冥途の道・六道の辻」(類)。

○緒じめの玉を地獄の市に捜し求め来て六道に迷う意。野辺の送り
で冥途への道を迷う意を絡ませる。

ないか〜なくハ落する釜底へ

○三オ五。○雑。

○ないか〜―競売の声。○落する―四段活用動詞「落とす」の連
体形で、当時の慣用。競り落とす。「落―地獄」(類)。○釜底―

「釜―地獄」(類)。

○市では値段に迷い、競り売りの「ないか〜なければ落します」
という声とともに、地獄の釜底に突き落とされるように落札された
というのである。

心のちりはつかぬ茶袋

○三オ六。○雑。

○心のちり―煩惱。雑念。○茶袋―葉茶を入れて煎じるための布袋。
ちゃんぶくろ。「釜―茶の湯」(類)。

○塵がついていないなら、茶袋を茶釜の底へ落とそう。前句の「な

いか〜」を、「親はないか」(こんなよい子供の親が見たい)とい
う褒めことばと取り成し、「心のちりはつかぬ」と応じたか。

笹の屋ハよう住なして夕涼

○三オ七。○夏(夕涼)。

○笹の屋―笹の葉で屋根を葺いた庵。笹の庵。草庵。○夕涼―「涼―
賢人の心」(類)。

○笹の屋によく住みなして夕涼みをしている人は、賢人らしく心に
塵もついておらず、茶を楽しんでいる、というほどの意。

亭主ハ尻のかるひ螢火

○三オ八。○夏(螢火)。

○尻のかるひ―立居のかがいがいい。○螢―「篠―螢」「夕―螢」
「涼―螢飛」(類)。

○笹の屋に住みなして夕涼みをしている亭主は、尻の軽い螢である。
亭主を螢に見立てて付けた。

人か二丁ゆけハ二丁も瀬田の橋

○三オ九。○雑。

○二丁―一町。○瀬田―螢の名所。「勢多―矢橋・長橋・螢見」(類)。

○動作も機敏な尻の軽い亭主は、人が二丁行くところを三丁ほども行くことである。

龍宮よりもとり勝のかね

○三才十。○雑。

○龍宮―「龍宮―瀬多・つき鐘」(類)。○かね―鐘。倭藤太(藤原秀郷)が、瀬田の橋で大蛇の化身の頼みにより、近江国三上山のむかでを退治して、龍宮で貰った褒美。「誠や此鐘は秀郷とやらの龍宮より取りて帰りし鐘なれば」(謡曲・三井寺)。「鐘―三井寺・倭藤太」(類)。

○龍宮の鐘を、人が二丁行けば自分は三丁も行って取りがちに取ってくる。前句の「瀬田」から龍宮の鐘を導き出した。

はくちわさ褌に成て飛入は

○三才十一。○雑。

○はくちわさ―博打業。○褌―「褌―負はくち・金」(類) ○飛入ば―「龍宮の中に飛び入れば、左右へばつとぞ退いたりける。其隙に宝珠を盗みとつて逃げんとすれば」(謡曲・海士)。

○前句の「かね」を金子に取り成し、博打で散々に負け、自棄になって龍宮の海に裸で飛び込み、金子を盗り放題にするというのである。

身のよくあかを落す水風呂

○三才十二。○釈教(よくあか)。

○よくあか―欲垢。身を汚す欲心の喩え。文明本節用集「欲垢煩惱ヨクアカボンナウ」。○水風呂―スイフロ。蒸風呂・塩湯・薬湯に対して湯水を用いるものを言う。茶の湯の水風呂に模して、桶の一部に焚口を設けてある。「褌―風呂」(類)。

○負博打で裸になり、水風呂に飛び込んで身の欲垢を落とすというのである。

月暮て是は冥途の旅衣

○三才十三。○秋(月)。○月の定座。○釈教(冥途)。

○月―「落―月」(類)。○冥途の旅衣―死装束。死者は湯灌(湯洗い)して死装束を着ける。

○夕暮に、冥途への旅衣を着けるため、死者の身を清める湯灌をするさま。前句の「よくあかを落す水風呂」を、生前の煩惱を洗い流す湯灌に取り成したのである。

枕につるきの山ををく露

○三才十四。○秋(露)。○釈教(つるぎの山)

○枕―「枕―臨終」―「月―身にしむ枕」(類)。○枕につるぎ―死者の枕元には剣を置く。「劍―冥途の山」(類)。○つるぎの山―剣を植えた地獄の山。○露―「露―月・装束・あだし野・涼しき暮」(類)。

○冥途の旅衣(死装束)の枕元に剣を置く。

さつとハさけ芭蕉の女あはれにて

○三ウ一。○秋(芭蕉)。

○ばさけ―ばさばさに乱れ。『嬉遊笑覧』に「今もちりみだれたるやうの事を俗にばさけると云なり」。○芭蕉の女―芭蕉の精。「誠は我は非情の精、芭蕉の女と現れたり」(謡曲・芭蕉)。「芭蕉―涼しき露」(類)。

○芭蕉の葉がばさばさに裂けて乱れ、芭蕉の精の何と哀れなことよ。前句の「枕」に、さつとばさけた芭蕉の葉を乱れた髪の毛と見立てて付ける。芭蕉の葉が裂けて剣のようだという意味も含む。

くどけはとんと落る神鳴

○三ウ二。○夏(神鳴)。○恋(くどく)。

○落る―「芭蕉葉のもろくも落つる露の身は」(謡曲・芭蕉)。

○一句は、女を口説けばとんと落ちるに、神鳴が落ちるを言い掛け

た。前句は芭蕉葉に雷の落ちたさま。

しのへ共脇から見ゆる臍かくせ

○三ウ三。○恋(しのぶ)。

○しのべ共脇から見ゆる―「忍ぶれど色に出にけりわが恋はものや思ふと人のとふまで 平兼盛」(拾遺集卷十一・恋)。○臍―「臍―神鳴」(類)。

○とんと落ちる神鳴に取られないように、脇から見えている臍を隠せという意に、口説かれて落ちた忍ぶ恋であったが、顯れてしまったの意を重ねる。

麝香の犬のほゆる通ひ路

○三ウ四。○恋(通ひ路)。

○麝香の犬―麝香鹿の異称。体長一メートル程で角がなく、腹部に麝香腺があり、そこから香を採る。麝香腺は、臍の後方皮下にある麝香囊中にあるので、麝香の臍とも言ふ。「犬―忍ぶ通ひ路」―「臍―麝香」(類)。

○忍ぶ通ひ路に姿を悟られて、犬に吠えられるという付筋。

唐人かさ雨のふる夜も風の日も

○三ウ五。○雑。

○唐人がさー中央の先端が尖った高い帽子。南蛮人、祭礼時、唐人囃子などをするもの、唐人船を売るものなどがあつた。『甲子夜話』に「松山侯ノ駕籠ノ者ノ笠ハ、世ニ唐人笠ト謂フ形ナリ、帽頭アリテ隆ク造レリ」。「犬一異国人」(類)。○雨のふる夜も風の日も「立烏帽子を風折り狩衣の袖をうちかづいて、人目忍ぶの通路の月にも行く暗にも行く、雨の夜も風の夜も」(謡曲・卒都婆小町)。

○雨の降る夜も風の吹く日も、唐人笠をかぶって人目を忍んで通うが、風変わりな格好なので犬が吠えかかる。なお、麝香は唐人の土産の一つである。

あふなけのなひ龍頭鷓首

○三ウ六。○雑。

○龍頭鷓首ーリヨウトウゲキシユ。平安時代から室町時代にかけて、皇族・貴族・社寺の行事などの際、泉池・河川で船楽を奏する御座船。二艘を一对とし、一は龍の船首、他は鷓の船首の彫り物を付けたり、絵を描いたりした。通常、船差四人、楽人または舞人十人ほどを乗せる。

○前句の唐人笠をかぶった人から、唐人踊や唐人囃子を連想し、船遊びの龍頭鷓首に取り成した。

おいくつで御さるそいまの曲舞ハ

○三ウ七。○雑。

○曲舞ー正舞に対して、簡単な舞を伴い鼓に合わせて歌う歌謡をいう。少年や美少女が立烏帽子、水干、大口の男姿で演じるものもある。「龍頭鷓首」に付く。

○幼童が危なげなく曲舞を舞うので、「いま曲舞を舞ったお子の年齢はおいくつで御さるぞ」と、褒めことばで応じた発話体の一句。

けふから習ふ清書とてこひ

○三ウ八。○雑。

○清書ーセイジヨ。文明本節用集「清書 セイジヨ」、日葡「Xeijo」。習字のこと。「若衆ー手習」(類)。○とてこひー取って来い。

○上手に曲舞を舞った人は、おいくつでござるぞ、今日から習字を習うとよからうから、筆・硯を取って来なさい。曲舞から美少年などを連想し、若衆に手習いの付けを響かせた。

詠ゆく小野の奥なる道具置

○三ウ九。○雑。

○詠ゆくーナガメゆく。○小野ー京都市左京区八瀬、大原一帯の古名。「比叡坂本に、をのといふ所にぞ住み給ひける」(源氏物語・手

習)。また能書家小野道風・小野のお通などをきかして、前句の「清書」にも応じる。「小野―道風」「手ならひ―小野の奥」(類)。

○道具置―道具を置くための台・棚など。

○今日から習う清書であるからと、筆・硯を奥座敷の道具置きに取りに行くさま。

月の鼠のをとなしの滝

○三ウ十。○秋(月の鼠)。○月の定座。

○月の鼠―月日の過ぎ行くこと。仏教では、人が象に追われて木の根に伝わって井戸の中に隠れたところ、井戸の周囲には四匹の毒蛇がいてその人を噛もうとし、また、木の根を黒・白二匹の鼠が齧ろうとしていたという。象を無情、鼠を昼と夜、毒蛇を地・水・火・風の四大に譬える。「鼠―月日」(類)。「鼠」で前句「道具置」をあしらった。○をとなしの滝―京都市左京区大原、來迎院の東方の滝。小野山の山腹にかかる。歌枕。「小野―音無の滝」(類)。

○月日は過ぎて、詠め行く小野の奥は、今では水が涸れてしまい音無しのの滝となっている。

なまぐさげ絶てひさしき秋の風

○三ウ十一。○秋(秋の風)。

○なまぐさげ―生臭気。生臭物。○絶てひさしき―「滝の音は絶えて久しく成りぬれど名こそ流れて猶聞こえけれ 右衛門督公任」(拾遺集卷八・雜)。○秋の風―「月」のあしらい。

○絶えて久しく吹かぬものは秋風ばかりではない。生臭気も絶えて久しいから鼠も音無しである。

後家たてすまし衣うつ也

○三ウ十二。○秋(衣うつ)。○恋(後家)。

○後家たてすまし―後家のまま通して世を渡ること。○衣うつ也―「新古今秋上 みよしの、山の秋かぜさよ更て古郷寒くころもうつなり 雅経」(類字)。「心の澄むものは、秋は山田の庵毎に鹿驚かすてふ引板の声、ころもしでうつ槌の音」(梁塵秘抄・二)。「衣うつ―秋風」(類)。

○生臭気も絶えて久しい後家は、秋風の中、砵を打って心を澄ましている。前句の生臭気を男女関係に取り成して付けた。

佛ハはなの鏡となる人しや

○三ウ十三。○春(はな)。○花の定座。○恋(佛)。

○はなの鏡―花の影のうつる池水などを鏡に見立てた語。「年を経て花の鏡となる水はちりか、るをや疊るといふらん 伊勢」(古今

集巻一・春。

○後家のまま二夫にまみえず世を通すのは、女の鏡となる人じゃ、と発話体に仕立てた。「佛」は、前句の「たて」の縁で、夫が佛に立つ意を効かせてある。

格子によりてのそく松梅

○三ウ十四。○春(梅)。○恋(格子による)。

○格子―女郎屋の格子。「格子―傾城」(類) ○のぞく―覗き見る。

「除―傾城部屋」(類)。「佛」「鏡」の縁語でもある。○松―松の位。遊女の最上位である太夫の位。○梅―梅の位。太夫に次ぐ高位の天神の異称。天職。

○格子に立ち寄って覗く恋しい佛の人は、松の太夫やら、梅の天神やら。「松梅」は「はな」のあしらい。

冬籠春の証扱やぬらん

○名才一。○春(春)。

○冬籠―「古今序 難波づに咲や此花冬ごもりいまは春べと咲やこの花」(類字)。「難波の春も幾久し。雪にも梅の冬籠。今は春への気色かな。」(謡曲・難波)。○春の証扱―「毛吹草」に「春といふ証扱にたつや朝霞 宗治」。

○冬籠もりをしていたが、格子に近寄って外を覗くと、春の証扱に梅が咲いているというのである。梅は、春告草とも言う。

白にせつかむ雪のむらぎえ

○名才二。○春(雪のむらぎえ)。

○白にせ―白似せ。すぐにそれとわかるにせもの。「証扱」のあしらい。○雪―「雪―冬籠る庵」(類)。

○春の証扱の雪消かと思つたのに、まだまだ春には遠く、雪はむら消えであつた。

此ふるひ煙をかくる富士の山

○名才三。○雑。

○煙をかくる―贖金に煙をかけて古びをつけること。また、贖金の真贋は、金付石にこすりつけ、火に燻らせて変色するかどうかによつて見る。○富士の山―「富士―雪」(類)。「雪のむらぎえ」をあらう。

○贖金をつかまされた。この古びは富士の煙でいふしたものだつた。

次第おくりの野辺の人穴

○名才四。○無常(おくりの野辺)。

○次第おくり順々に先へ送ること。○おくりの野辺―野辺の送り。

○人穴―溶岩流の表面部が凝結した後、内部の比較的柔らかい部分
が、発生したガスにより押し広げられて出来た空洞。「富士」のあ
しらい。『和漢三才圖会』に「富士山有洞、俗号人穴」。「富士―人
穴」(類)。

○順送りの野辺の送り火が、無常の煙をたなびかせている。

姑に嫁もかれはの女郎花

○名オ五。○冬(かれは)。○恋(嫁)。

○女郎花―「女郎花―野べの月・あだし野」「墓原―女郎花」(類)。

○野辺の女郎花もやがて枯葉となるように、嫁も姑となる。順送り
である。前句の「野辺の人穴」を墓と見做し、「女郎花」を付けた。

すかた見二面たてりとおもへハ

○名オ六。○恋(すがた見)。

○すがた見―全身を映す鏡。○たてりとおもへば―「古今秋上 女
郎花うしと見つ、ぞ行過る男山にしたてりと思へば ふるのいまみ
ち」(類字)。

○嫁と姑とのそれぞれの姿見が二面立ててあるというだけの付意。

執心の鬼にかはりて後の出は

○名オ七。○恋(執心)。

○執心の鬼にかはりて―「思にしづむ恨の数積つて執心の鬼となる
も理や」(謡曲・鉄輪)などのおもかげを踏まえる。「鬼神―鏡」
(類)。○後の出は―後の出端。後ジテ・後ツレ・子方の登場に奏す
る囃子事。神・天女・鬼畜・幽霊など非人間の役に用いる。

○姿見を見ると、恋の執念が凝り固まって、後の出端の鬼のような
顔に変わって映っている。

さいの川原のすころくの石

○名オ八。○無常(さいの川原)。

○さいの川原―賽の河原で、子供の亡者が、父母供養のため石を積
んで塔を作ろうとすると鬼が崩すが、それを地藏菩薩が救うという。
○すころくの石―雙六の石。賽の河原の石を取り成す。

○執心の鬼となって、賽の河原で雙六をしている。前句の恋の執心
から賽の河原で石を積上げる執心に転じた。なお前句の「後の出は」
の「出」は、雙六の賽の目の出所に通じる。

殊勝なり北へむかひて肩をぬき

○名オ九。○無常(北へむかひ)。

○北へむかひて一釈迦入滅のときは、頭北面西に横たわる。

○殊勝なことに北に向かつて、衣の肩を脱いで悟りを啓き入滅するというの一句の意。付意は、着物の肩を脱いで賽の川原で雙六博打に興じるというのである。

無常の起る疥癬所

○名オ十。○無常(無常)。

○疥癬所一ケンベキドコロ。邦訳日葡「Ganbeji(ケンベキ)〔訳〕肩の病氣。シモ(Ximo)その他の地方ではハキ(Fegi)と云う」。筋の凝る首や肩の辺り。

○打ち首で、北へ向かつて首を差し出せば、無常が起こり殊勝なこゝとである。釈迦入滅から打ち首に転じ、「疥癬所」は前句の「肩」をあしらい、疥癬を打つとした。

すてふちをうつつは曇る月の駒

○名オ十一。○秋(月)。月二句引き上げ。

○すてふち一捨鞭。邦訳日葡「Sutabuchi(ステブチ)〔訳〕急ぐ時に馬の後の方を打つ鞭」。○月の駒一「月の鼠」のもじり。月日の過ぎ行く速さのたとえであろう。なお、白毛にやや赤みを帯びて見える毛色の馬で、月毛の駒のことか。または、望月の頃に諸国か

ら献上する望月の駒のことか。

○捨鞭を打って馬を速く走らせると、月日は瞬く間に過ぎ、月に斑雲もかかつて無常が起こることである。「うつつは」は前句の「疥癬」のあしらいで、馬の疥癬所を針で打つありさまに取り成した。

主にハかたれぬ逢坂の秋

○名オ十二。○秋(秋)。

○逢坂一「捨遣秋 あふさかの関の清水に影みへて今やひくらん望月の駒 貫之」(類字)。「逢坂一駒むかへ」「駒一相坂」(類)。

○前句の「すてふち」を、由緒や功績のある家の老幼・婦女・癩疾者などに恵与として与えたわずかな給米の捨扶持に取り成し、その捨扶持さえも双六などの博奕に打ち込んでしまい、主には語れないでいるといったのである。

初紅葉それは錦ともめん物

○名オ十三。○秋(初紅葉)。

○初紅葉それは錦一「金葉秋 をとほ山紅葉葉散らしあふさかの関の小川に錦をりかく 俊頼」(類字)によって「逢坂」に付く。○もめん一「大和河内撰津よりは木綿を出す、近江美濃飛驒よりは真綿をのぼす」「木綿一河内・撰津国」(類)。「毛吹草」從諸国出古今

名物聞触見及類に「河内 久宝寺木綿」「摂津 津村木綿織帯・津村木綿足袋」。

○逢坂の秋は初紅葉して、錦と木綿物のように見えるが、錦に木綿が混ざっている、主にはとても語れない。

雑長持に入日時雨る、

○名オ十四。冬（時雨る、）。

○雑長持―雑多な道具を入れるための長持。○時雨る、―「時雨―紅葉」「紅葉―時雨ふる山」（類）。

○一句は無心所着。それを説明して論理化しているのが前句。錦と木綿が初紅葉ならば、雑長持に入日がしぐれる道理。

送り状数かく浪になく千鳥

○名ウ一。○冬（なく千鳥）。

○送り状―送荷の明細を書いて送り主が荷受け主にあてて送る手紙。

○数かく―数取りのために線を引くこと。また、水の上に数書くことで、はかない、つまらない、無駄である等の譬え。「ゆく水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」（伊勢物語五十段）。

○雑長持に入れるものの送り状を書くために数取りの線を引くとい

うのが付筋。それに日が落ちてしぐれる中、はかない波に漂いながら千鳥が鳴く意を絡める。

―算用残呼つきの浜

○名ウ二。○雑。

○算用―勘定。○残―ノコル。○呼つぎの浜―呼継の浜。尾張国熱田（現在名古屋市熱田区）にあった海岸で、現在は陸地化している。

「新後拾遺雑秋 なるみがた夕波千鳥立かへり友よびつぎの浜になくなり 巖阿上人」（類字）。

○前句の「送り状」を勘定書に取り成し、送り状の数をかくが、勘定が合わず残っているとした。呼つぎの浜では、はかない波に漂いながら千鳥が鳴くとあしらう。

命かな尾張の海へ継子たて

○名ウ三。○雑。

○尾張の海―呼つぎの浜。○継子だて―先妻の子、後妻の子に見立てた白・黒の碁石を、十五個ずつ円形に並べ、予め定められた石から順次十番めの石を除いていき、最後に残った一つを勝ちとする遊び。【たとへづくし】に「継子立の算用に等し 無常ヲ示ス也」。

○次々と尾張の海へ継子立ての子を放り込んでしまえば命のはかな

いことであるが、一人だけは継子立ての算用で命が残る、というのである。

苦屋のうちハ身ふるひがたつ

○名ウ四。○雑。

○身ふるひー「身振ひー臆病」(類)。

○尾張の海へ継子立ての子を放り込むので、苦屋のうちは本腹の子が臆病心で身ふるひがたつという意。

風通ふ夜着も枕もなかりけり

○名ウ五。○雑。

○夜着も枕もなかりけりー「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮 藤原定家朝臣」(新古今集卷四・秋)。

○苦屋のうちは夜着も枕もなく、風が吹き込んで寒さで身ふるひすることよ。定家の歌をもじり、前句の「身ふるひ」を寒さのためと取り成したのである。

俳諧いきにかるひ旅妹

○名ウ六。○雑

○俳諧いきー俳諧風。○かるひー軽い。○旅妹ー旅の姿。また、旅

の句。

○夜着も枕もない軽装の旅妹は、俳諧風である。また、旅の軽装の句「風通ふ夜着も枕もなかりけり」も俳諧風である。

唯花は見えたとをりの捨坊主

○名ウ七。○春(花)。○花の定座。

○捨坊主ー僧を罵って言う語。ここは謙遜。

○前句の「かるひ旅妹」を法衣一寒の行脚僧に取り成し、見えた通りの捨坊主でございますので、花は俳諧風に唯見えた通りの軽いものになりました、と応じた。

三十七の春もわらんへ

○挙句。○春(春)。

○三十七の春ー西鶴、三十七歳の春。本百韻を興行した延宝五年冬の翌年の春。「春」は、前句の「花」のあしらい。○わらんべー童子。

○三十七歳の春も見えた通りの捨坊主で、全くの童子にすぎません。

〔付記〕小稿は大学院の授業で読み合ったものを竹内がまとめ、

乾が修正を加えたものである。